INTERVIEW

五線譜の向こうに見えるものを探して

久元祐子

HISAMOTO Yūko

[文] 山本美芽
[写真] 酒寄克夫

歴史的な文脈や社会的な背景から音楽を掘り下げる切り口が注目を集め、レクチャー・リサイタルの依頼が増えている。しかし、5月に予定されている東京文化会館のリサイタルは「年に1回はトーク抜きで、純粋にピアニストとして弾きたいものを弾こうと思いまして…」

という位置づけ。モーツァルト、ベートーヴェン、リスト、そしてラトヴィアの作曲家ヴィートールスの作品を演奏する予定だ。曲目については、かなり詳細なプログラム・ノートを事前にホームページで公開する試みをしている。

「今度はどんな曲を弾くの？　とよく質問されるので、ホームページを見てね、とお答えできるようにしてみました。これを前もって読んでいただければ、リサイタル当日には演奏に集中できるメリットもあります」

演奏活動のかたわら、「ピアノが弾けない深夜と早朝を生かして」モーツァルトについて2冊の本を著し、本格的なウェブサイト『モーツァルトのピアノ音楽』を運営している。

「機械は苦手なんですけど、いろいろな方に助けていただいて（笑）」

ピアニストとしての深い音楽的教養と、気さくで好奇心にあふれる人柄がマッチして独特の魅力が醸し出されているせいか、ホームページにはアクセスする人が絶えない。

久元さんの練習室には、グランドピアノ、CDや本などの膨大な資料、パソコン、そしてパパがこよなく愛した鍵盤楽器のクラヴィコードが置かれている。

「ピアノの発達で取りこぼされた息遣いや繊細な香り、独特のピアニッシモ…それがクラヴィコードには残っていて、弾いていると細やかな音までとらえられるような気がします」

そう語る久元さんの目は、まるでミステリーを解くかのように輝いている。『学び』と『遊び』が結びついているのだ。

「曲を五線紙に記録するのは確かに良い方法です。だけど、人間が表現したいことの何分の一しか書けないのも事実。『その向こうに何があるのだろう』と思って探してみると、歌が聞こえる、街の風景が見える、同時代の作曲家の顔も浮かぶ、作曲家の人生模様が見える。私はそこに興味があります。文章でも迫ることはできますが、限界がありますので、ピアニストとして演奏で表現したいと思っています」

ピアノを弾くことにとどまらない多彩な活動を、薄紙を1枚1枚重ねるように、日々営み、そのすべてが音楽の本質に向かって収束していく。久元さんの語りに耳を傾けた時間は、薄紙がまた1枚、ふっと重なる様子が見えたかのような、不思議なひとときであった。

5月9日（木）19時　東京文化会館
モーツァルト：グレトリーによる8つの変奏曲ヘ長調／ベートーヴェン：ピアノソナタ第17番ニ短調「テンペスト」／リスト：「詩的で宗教的な調べ」から「葬送曲」／ヴィートールス：ピアノのための10の変奏曲（日本初演）／リスト：「巡礼の年第2年イタリア」から「婚礼」「ペトラルカのソネット第47番」、「2つの伝説」
問　プロアルテムジケ：03-3943-6677
http://www.asahi-net.or.jp/~ch5y-hsmt/